

牧師室から(2021.5.9)

大阪から海老名に赴任することが決まった時に、いくつかの楽しみが頭に浮かんだ。その一つが東京の大久保にあるコリアタウンに行って、韓国の本場の味のキムチとスープを食べてみたいということであった。大阪でも鶴橋というところに韓国料理店が多くあって何回か行って見たが、なぜか東京にいる時の大久保での味が忘れられない。店によると思うが…。

それともう一つは、20年前新宿で開拓伝道をしていた時に共に苦勞をしてくれた会員が今も東京に住んでいて会いたかった。懐かしい思い出いっぱい、彼女たちとの再会を楽しみにしていた。それがコロナ禍の中で、実現できないでいる。

韓国料理を食べてみたいという願望は、材料をインターネットで注文して作ってみたが、納得がいかない自分の料理の味で我慢するしかない。

そして、会えない二人には時々スマホのラインで会話をしながら、いつかの再会を待つしかない。

一人は音大を出て音楽教室を開いている。彼女はマリimbaとピアノの演奏の実力だけではなく、経営の手腕もあって多くの学生が集まり、その音楽教室の経営は順調であったよう。大勢の学生の華やかな発表会の写真を見るとその盛況ぶりが感じられる。だが、今はコロナ禍で学生が減りつつ、危機に面している。年初には何とか家賃を払え、食べられる状態であると笑い話のように近況を語っていたが、最近は辛いです、と力が抜けたような声である。

もう一人は、韓国の物品をデパートなどで販売する仕事をしているが、客が減っているという。世界を旅しているかのような生活をしてきた豪放な性格の彼女にふさわしく、スマホで送られたモロッコ人の夫の写真は俳優のように素敵でロマンチックな雰囲気である。彼はとても優しく誠実な人柄であるようだが、他国である日本での仕事は厳しいと言う。コロナ禍の中、夫は失業の状態、彼女は何とか仕事は続けているが、日毎に減っていく客と毎日電車に乗って出勤し、人々に出会う仕事の中で、コロナの心配をしては居られない生活に疲れを感じているよう。日本人も厳しい生活の中で、外国の人は何の保証も基盤もない弱者としての苦しみが増していく。

「祈ってください」と頼む彼女たちの声を聞くたびに、走っていてハグでもしたいのにできない苛立ちと、自分の生活が贅沢に思われて仕方がない、濟まない気持ちでいっぱいこの頃である。

どうか主の御守りと助けが彼女たちの上にありますように、変わらぬ元気な姿で会えるよう切に祈る日々である。

(鈴木善姫牧師)